

日本の近現代における都市集住形態としての下宿屋の実証研究
—東京・本郷・「本郷館」をケース・スタディとして—

代表 堀江 亨(日本大学生物資源科学部森林資源科学科 講師)
委員 松山 薫(東北公益文科大学公益学部公益学科 講師)
委員 高橋 幹夫(文化誌研究家)

[研究報告要旨]

下宿屋は、いわゆる近代主義の産物ではなく、“近代化住宅”でもないが、日本の近代化を特徴付ける特異な都市集住形態である。本調査研究では、これまで取組まれてこなかった、下宿屋の包括的な学術調査を試みた。

東京では、一般的に、下宿屋は、賄い等様々なサービスが供された集住形態であり、少なくとも昭和初期以降第二次世界大戦前まで需給の増加傾向があり、明治・大正期には自由だが墮落に陥り易く営利的で冷酷とする世評を抱かれ、業態は旅館と未分化で、取り締まる規則は明治初期から存在した。

東京の中でも、とりわけ本郷は東京大学をはじめとして各種の教育機関に隣接するため、下宿・旅館業が最も集中する地区であった。特に岐阜県西濃地域からの連鎖移住—明治中期から大正初期に下宿屋経営に成功した先駆者に続く、親類等同郷人の下宿業開業—は、本郷の下宿・旅館街形成に大きな役割をした。彼らは、相互扶助機能により同郷人の下宿・旅館業経営の安定に寄与し、同業者組合にて重要な地位を占め、議員活動等地域社会でも大きな役割を果たした。

本郷に現存の、または近年取り壊された下宿屋については、本調査研究では、本郷館を中心に、建築物の実測・経営者等からの聴取り・資料収集等により、建築・経営・生活の時代的変遷等の記録を行なった。下宿屋の建築的特徴には、中庭を囲む平面構成・各室に設けられた床の間の存在・高層稠密志向がある。また、本郷における高密度分布を地図で示した。